

本願寺八幡別院春法要&降誕会のご縁

なむあみだぶの居り場が知れた

【ご讃題】

- 一、阿弥陀如来の本願は 必ず救うまかせよと
南無阿弥陀仏の名となり たえず私に喚びかけます。
- 二、この喚び声を聞き開き 如来の救いにまかすとき
永遠に消えない灯火が 私の心にとまります。
- 三、如来の大悲に生かされて 御恩報謝の慶びに
南無阿弥陀仏を称えつつ 真実の道を歩みます。
- 四、この世の縁の尽きるとき 如来の浄土に生まれては
さとの智慧を戴いて あらゆる命を救います。
- 五、宗祖親鸞聖人が 如来の真実を示された
浄土真宗のみ教えを 共によろこび広めます。

はじめに

伝統ある本願寺八幡別院の春法要&降誕会のご法座にお招きに与り感謝に堪えません。
さて、七百五十回大遠忌を記念して「浄土真宗の救いのよろこび」という平易な形でお法りが表現せられ、ご本山の常例布教では、ご法座のはじめに唱和されます。
ところが今日、その第三聯にある「御恩報謝」の「御恩」が分からないと聞かされます。
現代は、お法りをお伝えするには、その原体験からお伝えしなくてはならない時代になってしまいました。

お救いにあずかるには、見遇、聞遇するには

浄土真宗のみ教えは何か、阿弥陀如来のお慈悲によってお救いに与るみ教えですね。
お救いに与るにはどうすればよいか。
救い主、お救いの法にお会いさせて戴くのが一番ですね。
お会いするのにどういう道があるか、一つが「見遇」であり、今一つが「聞遇」ですね。
「見遇」するにはご本尊を仰ぎ見ることですね。
「聞遇」するには、如来様から賜ったお念仏を称えさせて戴くことですね。
お念仏は如来様から賜った如来様の行(大行)ですから、称えれば直ちに大行が私の上で働いて下さり、聞こえて下さるものがありますね。南無阿弥陀仏ですね。
聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそは、如来様がこの阿弥陀をタノメ、阿弥陀にマカセヨと喚び続けていて下さるお喚び声だったですね。

阿弥陀如来のお姿を直々に仰がせて戴くことを「見遇」といい、お喚び声をお聞かせに与ることを「聞遇」というのでした。

インプット	活動	アウトプット
苦悩の衆生(私)	礼拝する(ご本尊のお姿を仰ぎ見る)	見遇できる
	見遇から ↓ 聞遇へ	
苦悩の衆生(私)	お念仏する(称名、聞名、信心、随念)	聞遇できる

(考察)御法話の実際では、お話を躍動的にするために、まず「見遇」のそもそもの由来を仏説観無量寿経に則って短く物語風にご案内します。

しかして、観経第七華座観で「除苦悩法(仏説無量寿経一卷)を説こう」とのお釈迦様のお言葉に合わせてお姿を現されたのは、阿弥陀如来そのお方(弥陀三尊)でありました。

そのお心は、「除苦悩法のその救いの主(法)とは私だよ」にありました。

整理しますと

- ・除苦悩法(無量寿経一卷)が「教」を表しているのに対して
- ・「住立空中尊」こそは、阿弥陀如来が働き出して下さる法(行)そのものを表していると頂戴することができます。
- ・色もなく形もない法性法身が、本願を誓って現れて下さったものが方便法身ですから、その働きをご案内するには、衆生がこの目で仰ぎ、この口で称え、この耳でお聞かせに与れるように、観経にご案内載っている方便法身のそのままにご案内することが大事だということになります。

「方便法身を機能不全に陥れてはならない。」

- ・これが、歴史的な御常教の影響下で、信心獲得前のお念仏を自力に陥るからこれを許さないとする隘路に陥ってきた御法話現場の説きブリを見直す手掛かりになります。
- ・住立空中尊こそは、浄土真宗のご本尊の由来であり、お木像・ご絵像はこれを象(かたど)ったものであります。

ここで、像というのは似姿であり、その本質は、お名号です。お名号、南無阿弥陀佛の南無とは帰命、親鸞聖人が六字釈に明らかにして下さったように、その本質は喚び続けていて下さる本願招喚の勅命だったですね。

このお法りをしっかりと頂戴してゆくには、私たちに先立ってお法りを頂戴して往かれた分陀利華、妙好人の行状録に習ってお聴聞させて戴くことですね。

インプット	活動	アウトプット
苦悩の衆生(私)	お聴聞をする / 法話をする	妙好人
	↓ (仏道)	
苦悩の衆生(私)	お聴聞をする / 法話をする	妙好人

妙好人とは誰か、浅原才市さん、因幡の源左さん、六連島のお軽さん等のお名前が挙りますね。

なむあみだぶの、居り場が知れた

真っ当な字さえも書けなかった妙好人の「浅原才市さん」が残された歌には、私どもがなかなか行き着けぬ高い境地が歌い上げられています。

その一つが「なむあみだぶの、居り場がしれた」です。

これはすごい命題ですね。

なむあみだぶの、居り場がしれた、 どをして知れた。
 わしの心に、みちみちて、 なむあみだぶの声で知られた。
ごをんうれしや、なむあみだぶつ、 なむあみだぶつ。
 どうして知れたかというと、

- ・ まず「わしのところにみちみちて」とおっしゃいました。

これは、親鸞聖人七十八歳の時の和語のお聖教『唯心証文意』（註 p709）のお言葉「この如来、微塵世界にみちみちたまへり」を彷彿とさせます。

ここでの「心」は、「いのち」とも捉えるべきものだと言楽先生はおっしゃいます。煩惱成就の凡夫の中に、既にして如来は、みちみちていてくださいます。

- ・ 次に「南無阿弥陀仏の声となつて聞こえて下さったその声で知られた」とおっしゃいました。これは、才市さんが、称えれば直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀仏こそは、如来様のお喚び声だと頂戴していらっしゃった動かぬ証拠ですね。

才市さんは、既に如来様に「聞遇」していらっしゃったんですね。

だから後は説明が要りませんね。

- ・ ただちに「御恩うれしや」と謳っていらっしゃることと知られますね。

面白いことに、才市さんは、なもあみだぶの居り場が知れたと一見矛盾するような次のような詩も残していらっしゃいます。

くちに出るのが、 なむあみだぶつ。 ふしぎでならぬ なむあみだぶつ、
をりばがしれぬ。 しれぬはずだよ。 機法一体、 なむあみだぶつ。

法が働いていて下さる自らの外に南無阿弥陀佛の居り場を求めても知ることはできないとおっしゃっているのです。決して、最初の命題と矛盾するものではないことが知られますね。

また、次のような詩も残していらっしゃいます。

あなた、をじひわ、 奇妙な、をじひ。 めにも、みぬのに、 こゑがする。
 よんで下さる、 じひのまことよ。

みえないお姿の本質は、喚び覚まそうとして届いて下さるお喚び声だとおっしゃっていて下さるのでした。“声”が大事だったと知ることができますね。

その才市さんがお念仏を法の次元で頂戴していらっしゃったことが次の二つの詩より明らかになります。

悪にかたまる、 わたくしが、 悪をも見ずに、 法を喜ぶ。
親のをかけて 機をとられ、 ご恩うれしや なむあみだぶつ。

如来様の智慧の光に照らし出されて明らかになったこんな私がお救いに与れましょうか
浄土真宗のお同行の最後の疑いでありませう。

このとき布教使からご案内されたのが「そのままのお救い」というお言葉でした。
「悪をも見ずに法を喜ぶ」「機をとられて御恩を喜ぶ」。

これは、自らはお救いに与る力の無い悪人がお救いに与っていく姿（悪人正機）ですね。
そこには大きな慶びが伴い、御恩報謝の御恩の原点になることがわかりませう。

なんとなく、 なんともないに、 なんとなく、 機と法が、
もつれて、 法をたのしむ。 ごをんうれしや。 なむあみだぶつ。

お念仏は、うたがいもなく法の働きだったことが知られませう。

閉目開目にありありと見える

今年の三月、新発意の赴任する南米開教区ロンドリーナ本願寺から小包が届きました。
その中に昨秋ロンドリーナ本願寺で営まれた六十五周年記念行事の記念写真がありました。
お内陣の写真は見覚えがありました。

思い起こしました。

三年前に訪問布教したとき、新発意は、打敷を持って来てくれというたんですよ。

突然の話に対応できるものもない。

坊守が申しませう。時間はあるから、私がぼちぼち手縫いすると

それからデザインを手掛け、布地や端布を買い求め、二年近くたって漸くにして完成しました。
出来上った打敷と水引は、昨夏世界仏青大会に来訪した同寺の青年に託して送り届けられませう。
記念行事の当日のお内陣の打敷の姿は目を見開いても目を閉じてもありありと脳裏に浮かびませう。
坊守が二年近く掛けて縫い上げた打敷は、閉目開目にありありと目に浮かんだのです。

観経「日想観」では一向にピンと来ていなかった不肖に、如来様は打敷を通して浄土の莊嚴を
知らしめ給うたのです。

違いは一般的な入り日の姿と異なり、何ゆえに打敷が所望されたか、どのような経過を経て打敷が編まれたのかの一部始終を知る不肖にとって、閉目開目にありありと浮かんで下さるその姿は胸に迫るものがありました。

お内陣の打敷の莊嚴こそは、紛れもなくお浄土の莊嚴だったです。

お浄土の莊嚴の本質は、喚び続けていて下さる如来様の本願招喚の勅命だったのです。

四月二日のご本山でのお御堂法話で「閉目開目にありありと見える」とお伝えしたところで不肖は絶句してお取次がままならなくなりました。

けれども、お同行はそうではなかったのです。

あのお話が有難かったとお聞かせに与ったからです。

お御堂一杯にみちみちていて下さった如来様の心(命)が聞き手の御門徒さんも包み込んで居て下さって居たからです。

お姿こそは声なんです

- ・「住立空中尊」は、お姿となって現れられた如来(tathâgata)であります。少なくとも私達は、観経第七華座観のおいわれを振り返ることができます。
 - ・この御指南の許に、大教第十七願を頂戴すれば、“諸仏如来が悉く咨嗟”なさるは、無量寿経一卷のみ教えを指し、“称我名”と聞こえて下さるは、「その救い主とは私だよ」と喚び声になって現れ給うた阿弥陀如来そのお方の大悲招喚の勅命だったと頂戴することができます。
 - ・成就文に習って、第十七願と第十八願とを一連に頂戴すれば、衆生は、如来の喚び声を聞名し、頭を垂れ(憶念=信樂)、如来に随うて随念(称名)すれば、直ちに衆生の上に大行が働いて下さり、南無阿弥陀仏のお喚び声が聞こえて下さると頂戴できます。
- 聞名 憶念 称名のサイクルアップで終にそのときがやってきて、如来の喚び声に喚び覚まされるとき、永遠に消えない灯火が衆生の心に灯るのであります。合掌。

正覚寺降誕会(ごうたんえ) 五月十五日(日)十三時半より

仏教婦人会例会 五月十五日(日)の降誕会に合わせて営みます

八幡別院 春法要 住職出講 五月十六日(月)十三時半より、御法話は十四時より

八幡別院 降誕会 住職出講 五月十七日(火)午前十時より、御法話は十時四十分より

仏教壮年会お聴聞の会 六月五日(日)二十時より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥